

# Dear Friends ディア フレンズ

2007(平成19)年1月5日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督・脚本＝両沢和幸／原作＝Yoshi『Dear Friends』（講談社文庫刊）／出演＝北川景子／本仮屋ユイカ／黄川田将也／佐々木麻緒／宮崎美子／大杉漣／小市慢太郎／大谷直子（東映配給／2007年日本映画／115分）

……いじめや自殺が大きな社会問題になっている昨今、女子中高生のカリスマ作家の原作が映画化！ 主人公は「友達が必要な時にだけ利用するもの」が持論の美貌を誇るわがままな女子高生。そんな彼女を突然の病魔が。思いもかけない事態の中、彼女の人生観・友人観はどのように変わっていくのか？ 「友達」の2人が主人公以上の難病であるところがミソだが、再三登場する「だって友達なんだから……」というセリフをどう受けとめる……？

## 女子中高生のカリスマ作家とは……？

この映画の原作は、日本初のケータイ小説『DeepLove』を配信し、たちまち女子中高生のカリスマ的作家になったという Yoshi。もちろん私は全く知らなかったが、書籍化された『DeepLove』シリーズは現在では270万部を超えるミリオンセラーで、続くさまざまな作品も連続ミリオンヒットになっているとのこと。

そんな Yoshi が、いじめや自殺が社会問題となっている昨今の情勢に注目し、「友達」に焦点をあてて描いたこの物語は、女子中高生に加え、女子大生・OLにも共感の輪が広がり、口コミだけで原作本50万部、コミックスも30万部を超えるロングセラーになっているとのこと。今ドキの女子中高生が共感できるように描かれているのだろうが、団塊世代から見ると、そんな悩みはただ贅沢なだけ？

## 私の注目は何といっても北川景子……

主人公リナ役を演ずる北川景子は、2003年度ミスセブンティーンに選ばれて人

気専属モデルとして活躍中、華麗にモデルから女優に転身してきた注目株。しかも、そのデビュー作は、私は観ていないが森田芳光監督の『間宮兄弟』（06年）。美人姉妹の姉沢尻エリカの妹役を演じて一躍注目されたためか、何とその3作目はハリウッド映画『ワイルドスピード×3 TOKYO DRIFT』（06年）に……。

そんな北川景子を、『キネマ旬報』9月下旬号は巻頭特集「注目の本格派若手女優2006」として、長澤まさみ、宮崎あおいら7名の若手女優の1人として取り上げている。浜崎あゆみ風(?)の今ドキの典型的な美人顔だが、この映画ではそのルックスにふさわしく(?)「友達が必要な時にだけ利用するもの」と公言する、傲慢な女子高生役に。顔やスタイルを鼻にかけたそんなイヤなタイプの女子高生の「友達観」がテーマだが、小難しい理屈よりもまずはその美貌に注目!

### やっぱり難病モノ……?

セカチューこと『世界の中心で、愛をさけぶ』（04年）のヒット以来(?)純愛モノが大流行となったが、同時に観客を泣かせるには難病モノが1番という傾向も……。そしてそれは、韓国映画も同じ……。そんな時代的風潮の中、Yoshiが『Dear Friends』という物語を書くについて選択したのが難病モノ。

美人を鼻にかけ、クラブの女王としてカリスマ的存在となっている女子高生リナが、突然ガンだと告知され、自慢の美しいロングヘアがバツサリと抜け落ちていく現実に直面するとしたら……。さらに、リンパ腺から胸に病巣が転移し、乳房の全摘出手術を受けなければならなくなったとしたら……。その落差があまりに大ききだけに、リナのショックの大きさは計り知れず、自殺しようとしたのはある意味当然……。しかし、リナがそれを思いとどまったのは、2人の女友達との友情……。今ドキの「ケータイ小説」らしく(?)わかりやすい(というより安易な)ストーリーだが、さてその出来は……?

### いくらベッピンでも……?

数年前にマイカーを手放し、大阪市内をチャリンコで走り回っている私は地下鉄に乗る回数が増えたが、車両の中で目立つのは若いヤツらの傍若無人な振る舞い……。バスの中で目の前に立っている目の不自由な女の子に席を譲ろうとし

ないリナの姿に怒ったおばさんが、文句をつけるシーンが登場する。ところがそれに対する返事は、「なぜ譲らなければならぬの？」というあきれたもの……？

こんなワガママな娘を見ていると、つい親の顔を見たいと思ってしまうが、このリナの父親幸三（大杉漣）は仕事人間らしく、娘の教育は母親まかせ。そして母親加奈子（宮崎美子）は「リナちゃん、リナちゃん」と娘のご機嫌とりばかりしている過保護タイプ。一人っ子政策をとる中国では、こんなわがままいっばいに育てられた子供を「小皇帝」と呼んでいるが、この映画のリナはまさにそれ。言葉遣いはまるでダメ、行儀作法もまるでダメ、家庭でも学校でも好き放題、やりたい放題の毎日のようだ。これではいくらベッピンでも話にならず、まさに安倍首相が強調している教育再生が不可欠なことを実感！

## 今ドキ、こんな女の子がいるの……？

この映画でリナと正反対の「いい子」がマキ（本仮屋ユイカ）。マキはリナの小学校からの同級生だが、病院に入ったリナをマキが見舞っても「あんた誰？」と言われるほどだから、昔から印象の薄い女の子だったよう……。そんなマキがリナのことをずっと友達だと思っていたというエピソードが、Yoshiの原作の1つのポイント。そしてその小道具となるのが、私が大学生の頃に大いに歌ったフォークソング『今日の日はさようなら』の曲を奏でる小さなオルゴール。さて、それがどのように映像化されているのかは、あなたの目でしっかりと……。

映画の冒頭は、頭にすっぽりと毛糸の帽子を被ったリナが病院の屋上から飛び降り自殺を図ろうとするシーン。それを思いとどませたのがこのマキ。胸に転移したガン細胞を除去するため片方の乳房を失ってしまったリナは、マキに対して「オマエに私の気持ちわかるのかよ！」と叫んだが、そこでマキは「私も同じ痛みを味わうから死なないで」と言うなり、アッと驚く行動を……。ケイタイ小説としてはすごくわかりやすい設定だが、これはあまりにも現実離れがすぎるのでは……？ そして、ホントに今ドキ、こんな女の子がいるの……？

## やっぱり子役はトク……？

この映画は不幸な人たちのオンパレード……？ 誰もがうらやむ完璧なルック

スを持ったリナが突然ガンを告知されるというのも不幸なら、マキもある難病が徐々に進行している身。そして、リナと同室になったカナエ（佐々木麻緒）も、小さい時からガンと闘っている女の子だが、いよいよ人生の最期を迎えようとしている身……。そんな中、マキの場合は何となく友達の押し売りの雰囲気があったが、カナエの場合は子供だけに、「小さい時から病院にいるのでお友達がいなの」「お友達になってくれる？」という直接的なお願いにも説得力が……？

『スウィングガールズ』（04年）でトロンボーン奏者の関口香織役を演じたマキ役の本仮屋ユイカは、「実力派若手女優」の1人として特に映画後半に熱演を見せるが、カナエ役の佐々木麻緒の場合は子役として自然な演技をしているだけで十分。やっぱり子役はトクだね……。

### 今ドキ、こんな男ばかり……？

姿カタチの美しさは一時のもので、本当の美しさはその心にある……。などというは建て前で、男が惹かれるのはやはり姿カタチの美しい女性……。クラブの女王としてその名を馳せていたリナを何とかモノにしたいと狙っていたのが、DJの洋介（黄川田将也）。しかし、男の扱いにも長けた（？）リナはそうスナリとは落ちず、じらす戦術が大成功……？

今まで女を口説いて失敗したことがないという洋介は、そんなリナを見ているうちに本心からホレたと告白。長い闘病生活の中で、髪の毛を失い、片方の乳房まで失ったリナは「男を断つ」と決めたものの、洋介からやさしい言葉をかけられるとつい情にほだされ、「今の言葉を信じていいのね……」と確認のうえ、ラブホテルへ。しかし、「自分で服を脱ぐ」と言って洋介の目の前にさらしたリナの姿を見た洋介は……？ 今ドキの男って、洋介のような口先ばかり……？

### こんな患者では病院もさぞ大変……？

入院中だったカナエも、通院していたマキも、自分の病氣と真剣に向き合い、闘っている理想的な患者。しかし、「ガキでもできたんじゃないかなと思った」と言いながら病院に運び込まれてきたリナが、病院で示す態度は最悪。当初、担当医の木下医師（小市慢太郎）が、「検査を受けるのがイヤなら、点滴をはずし

て家に帰ってもいいですよ。そのかわり一切の責任を持ちませんから」と言い放ったのは当然で、その言葉に拍手を送りたいほど。しかし、そんな出来の悪い患者でも、病人である以上できる限りの治療をするのが医師たるものつとめ……。

それを支えるのが婦長（大谷直子）だったが、彼女を見ていると病気そのものよりも、患者の気持のケアがいかに大切かということがよくわかり、「俺も入院しなければならなくなったら、こんな病院に……」とつい思ってしまったほど。しかし、医師や看護婦への口のきき方も知らず、入院中の態度も最悪のこんなワガママ患者では、病院もさぞ大変……。

## やっぱり「性善説」が……

美貌を鼻にかけ、生意気でワガママ、そして口のきき方も知らないような女子高生の「生態」を見ていると腹の立つことばかりだが、映画も後半に入ってくると、ボチボチ、ストーリーの落しどころが見えてくることに……。病巣の胸への転移を手術によって除去したリナは、やがて退院できることになったが、退院して海の近くの病院に行くと言っていたカナエは……？ 他方、通院で治療していたマキは病状が次第に悪化したため、リナの退院にも立ち会うことができなかつたうえ、リナが洋介から示された行動によって自暴自棄になった時にも、顔を見せることができないまま……。しかし、リナが2度目の自殺を試みようとした時、車椅子に乗って登場したマキの病状は……？

そもそもリナは、美貌を誇り、クラブの女王として君臨していた姿を基準として物事を見ているから、ちょっとした病気になると自分が悲劇のヒロインのように思え、生きる希望を失ってしまう傾向が……。ところが、もともと大きな不幸を背負っているマキやカナエは、何が幸せなのかについての基準がリナとは全然違うもの。ワガママ娘のリナに対してそんなお説教をいくらしてもリナは聞く耳を持つはずはないが、マキやカナエから現実に必死で生きようとする姿を見せられると、さすがにリナも幸せの基準の違いを感じ、理解する能力はあったよう……。映画終盤になってからのそんなリナの変身ぶりを見ていると、やはり性善説が正しいのかな……？

2007(平成19)年1月6日記